

父の想いを引き継ぎ、自分の行動へ

横浜市立中和田中学校3年 小坂橋 美久

私達の生活には、もしものための安全網が用意されており、その結果安心して暮らすことが出来ている。私は、両親のおかげで、何不自由なく生活してきたため、今まで安全網に、あまり関心が無かった。しかし、私の父が、父親を早くに亡くし、母子家庭になったことから、生活保護を受けながら、育英会の奨学金で大学を卒業したという話を以前してくれたことを思い出した。当時の私は、自分のことではなく、自分はそういう立場にないことから、深く考えることもなく、何も感じることは無かった。改めて父に、当時の心境や安全網について話を聞くことにした。

「高校受験前に父親を亡くした時は、将来がとても不安だった。母親と妹を自分で守っていかないといけないし、何より金銭面が不安だった。自分は、高校や大学に行かず、働いたほうがよいのではないかと思った。不安過ぎて勉強どころではなかった。」そう言って父は、当時の心境を話してくれた。「結局は高校も大学も行くことが出来た。生活保護や奨学金のおかげでね。本当に日本人でよかったし、感謝している。」と続けて話してくれた父から、私は、当時の父がとても不安であったことや安全網を知り安堵したであろうことが、自分の体験のように感じる事が出来た。

父と話をした後に父と一緒に税金や安全網について一緒に調べることにした。税金があることで、所得のより多い人から、所得のより少ない人への再分配が行われていることがわかった。所得が多い人ほど多く税金を払う累進課税制度は、頑張った人が馬鹿を見る制度だと批判する人がいることも知った。父は、昔は支えられる側で、今は支える側となっている。累進課税制度上、高い割合で負担している。父は多く税金を払っていることは誇らしいことだと言った。どちらの立場も経験したからこそその言葉なのだと感じた。父は税金のおかげで、高校も大学も行くことが出来たと本当に感謝しているようだ。累進課税制度を批判する人達は、私のように、苦勞して税金に助けられた経験がないから、そのような発想になってしまうのだろうと理解した。

父のおかげで疑似体験できた私は、父が経験したように、自分もいつ支えられる立場になるかわからないため、納税は必要だと感じた。日本は、税金による安全網がきちんと整備されているから、安心して生活も出来るし、犯罪も少ない国なのだと思う。ひとはみんなのためにみんなはひとりのためという気持ちでみんなが納税したら、きっと今より幸福な国になると思う。自分だけでは大きな事は起こせないが、自分が継続して思い行動することで、自分の周りの人達を巻き込んでいきたい。ひとつひとつが小さな行動であったとしても周りの人達と合わせれば、大きな力となると思う。まずは自分から小さな一歩を踏み出していこうと思うし、この気持ちを大事にして社会人になっていきたいと思う。